

明恵門下における教学と実践の継承

野呂 靖(龍谷大学)

明恵房高弁(1173-1232)没後、門弟たちの間では伝記の作成や遺跡の整備など、明恵生前の行状を顕彰する作業が進められていった。なかでも、明恵随一の門弟であった義林房喜海(1178-1250)や順性房高信(1193-1264)は、『解脱門義聴集記』『光明真言句義釈聴集記』といった明恵が高山寺において行った講説にもとづく「聞書」を編纂するなど、明恵の教学の継承に尽力したことで知られる。そうした明恵門下における教学継承の実態については近年、資料の翻刻などにより徐々にその全体像が解明されつつあるものの、思想的検討はいまだ十分になされていないのが現状である。

本発表では、明恵の孫弟子にあたる十恵房順高(1218-1272-?)によって編輯された『五教章類集記』を取り上げたい。本書は明恵没後である貞永元(1232)年以降に行われた喜海による『華嚴五教章』講説をとどめた聞書であるが、喜海による講説のみならず、複数の明恵の門弟によるコメントが収載されている。なかでも注目されるのが、『五教章』の主要箇所に関する明恵の注釈が「禅堂院口」の形式で保存されている点であり、明恵自らによる『五教章』注釈書が存在しないなかで、きわめて貴重な資料と考えられる。

明恵や喜海による『五教章』理解は、寿靈『五教章指事』や宋代における注釈書が念頭に置かれた基本的なものであるが、随処に密教説との異同に言及されている点に特徴がある。なかでも成仏説については、即身成仏説と華嚴における三生成仏説・現身成仏説との一致が指摘されている。また、東大寺義との相違についても意識が向けられていることから、明恵没後の早い段階から、高山寺における独自の教学的立場を構築しようとする門弟たちの意図をうかがうことができる。

ところで『五教章類集記』における明恵門下の注釈態度は、頼瑜(1226-1304)や聖憲(1307-1392)、道瑜(1422-1493)など根来寺の学僧らによって行われた『五教章』注釈書類と共通する内容を有している。発表者は以前、高信の密教理解が頼瑜など根来寺における即身成仏解釈に影響を与えた可能性を指摘したが、同様のことが華嚴学についても指摘できるように思われる。

本発表では、明恵による『五教章』に対する口説を整理した上で、喜海の注釈と比較し、その思想的特色を紹介したい。さらに、鎌倉期以降に作成された東大寺や根来寺における『五教章』注釈書類と比較することで、明恵没後、高山寺における華嚴学がいかに関承されていったのか、を考えるための一助としたい。